

<かえる考>この8月15日は戦後70年の節目でした。戦争の苦難をいま直に語れる人達より10歳ほど若い筆者らの世代は当時あまりに幼く戦災の記憶がほとんどありません。ただ、今では考えられないような戦後の貧しさを経験しています。その一方では豊かな自然のあったことを思い出します。大都市の近郊でも小川、池、野辺や丘には生き物が満ちていました。いろんなカエルもごく普通に見られ春から夏にかけての子供たちの遊び相手のひとつでした。

カエルたちがあちこちで姿を消してしまった今ではSHCの自然は貴重です。春の訪れとともにビオトープの池でカエルの鳴き声を耳にし姿を見ればほっとします。オタマジャクシはもう生まれたか、子供(幼体)はまだかと探しているうちに夏そして立秋です。写真はビオトープに棲むニホンアマガエルとシュレーゲルアオガエルのおおよその成長過程



<ニホンアマガエル> (幼体)



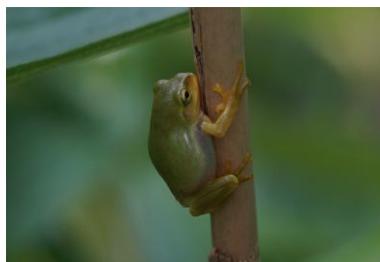
(もう少し大きくなった幼体)



(成体)



<シュレーゲルアオガエル> (幼体)



(かなり大きくなった幼体?)



(成体)

(個体は別々)を撮ったものです。後者の方が高い鼻をしていて幼い時からすでに顔立ちが違いますね。鳴き声もシュレーゲルアオガエルの方が澄んでいます。ニホンアマガエルはヒキガエルの親戚ゆえ「さもありません」とも思うのですが、いささか酷でしょうか。

<かえるとかわず>昔から日本人にとってカエルはスズメに並ぶ親しみのある身近な生き物で蛋白源でもあったようです。日本書紀にも登場し万葉集では多くの歌が詠まれています。“かえる”の語源ははっきりしないのですが、和歌や俳句では“かわず(づ)”で、もとは“カジカガエル”を指したようです。このカエルは暑い時期に清流の岩場で「フィー、フィー、フィフィフィ」と澄んだ声で鳴きます。古今和歌集仮名序(紀貫之、注1)にはウグイスと共に登場するほどです。

<カジカガエル：(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所提供>

(注1：古今和歌集仮名序)和歌の本質を説く、とされています。冒頭文に「やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける(中略)花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生くるもの、いづれか歌をよまざりける 力をも入れずして天地を動かし、(中略)猛き武士の心をも慰むるは、歌なり)」とあります。



<俳句> “かわず” と言えば「古池や蛙飛び込む水の音(芭蕉)」という句がまず浮かびますね。この一句について俳人、文学者、禅僧はては我々まで議論百出で、たった 17 音の力と芭蕉の凄さを感じます。ところが一茶や蕪村には“かわず”を親しく詠んだ句が幾つもあるのですが(注2)、芭蕉は先の句のほか、ヒキガエルの一句を詠んでいるだけで不思議です。芭蕉は蛙が好きではなかったのでしょうか(注3)?

(注2) 代表句として、一茶：「やせ蛙まけるな一茶これにあり」、「悠然として山をみる蛙かな」、蕪村：「月に聞て蛙ながむる田面かな」、「およぐ時よるべなきさまの蛙かな」があります。

(注3) 無粋な者の戯言として。芭蕉の発句は一茶や蕪村に比べ少ないこともありますが、生き物を詠んだ句が少ないですね(約 40 句)。その中でもヒバリ、チョウやウグイスの句は併せてその 1/3 以上になるのですが。

<与謝蕪村による芭蕉像>→

<民話、童話> 日本には「ある男が蛇に吞まれそうになった蛙を助け、その蛙が若い女の姿となって現れ恩返しをする(蛙女房)」を始めいろんな民話が各地に伝わっています。また“帰る”とか“返る”と“福”や“お金”との語呂合わせで縁起の良い生き物とされてもいます。

先の昔話の蛙のように日本人は鶴も狸も狐も人の姿にします。ヒトと他の生き物との距離が近かったのでしょう。それどころかいろんな生き物にヒトにはない霊力、魔力を感じていたようですね。蛙、鶴、狸も狐も自分の力で人の姿になるのですから。一方、西洋では人が魔法によって蛙などの“醜い(?)”生き物にされてしまいます(注4)。生き物が人に変身することはあまりなさそうで、人間は特別という捉え方のように思えます。

(注4) かえるの王子(グリム童話)、カエルの王女(ロシア民話)などがあります。おやゆび姫(アンデルセン)ではヒキガエルが登場します。

<絵画> 蛙の登場する絵画といえば鳥獣人物戯画(高山寺)があまりにも有名です。戯画では蛙、兎と猿が人並みなのに対し鹿や猪は家畜です。鳥獣を人々に擬し日常を描くのに本来の家畜を除き鹿や猪を登場させたのでしょうか。ところでここに登場する蛙たちは姿からしてトノサマガエルのようです。画では敏捷で悪戯もしそうな蛙たちです。アマガエルでは可愛らしすぎ、ヒキガエルでは相撲を取ったり弓矢を扱うには落ち着き過ぎです。ヒキガエルは位の高い役とか呪術師や陰陽師に相応しいでしょう。ヒキガエルと言えば蝦蟇(がま)、“蝦蟇の油”に“蝦蟇仙人”、後者は水墨画としてよく描かれている上、歌舞伎や浄瑠璃にも登場します。蝦蟇の妖術を使う義賊“自来也”は 19 世紀初頭の読本によるのですが最近の漫画にも登場するとのことです。

(文と写真：松本正勝)



<鳥獣人物戯画甲巻、第 16 紙後半—第 18 紙：左の蛙たちは転がされた兎を見ておお笑い。また右の蛙は兎の耳に噛みついてる>